

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：15301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：23653248

研究課題名(和文) 初任保育者のための子どもと家族をつなぐ心理学的研修プログラムの構築に関する研究

研究課題名(英文) A study on the development of psychological training program for newly hired childcare workers to connect children with their family

研究代表者

片山 美香 (KATAYAMA, MIKA)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：00320052

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)： 初任保育者は、子どもの発達上の課題を理解してもらうことや、子どもや保育に無関心な保護者の意識を高めるような、発信型の対応に困難感を持ちやすいことが明らかになった。また、積極的に子どもの様子を伝える等、保護者との信頼関係の構築に努めていることが示された。さらに、支援に行き詰った際には、上司に相談して助言を得るなど、主体的な課題解決に向けた行動力が必要であることもわかった。

保護者との信頼関係を築くための日常会話の持ち方、保護者の心情を受けとめた上での子どもの発達課題の伝え方、継続的に子どもの育ちを保護者とともに見守りながら必要な支援の共通認識を図る、心理学的研修の必要性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： We found that newly hired childcare workers have difficulty with communication with parents, such as to get parents to understand their children's developmental issues and to raise parents' awareness who are indifferent to their children and childcare. We also found that they strive to build a trusting relationship with parents by proactively informing parents of their children's condition. Furthermore, we found that when they reach a dead end, positive attitude toward problem-solving, such as to consult their superior to receive advice, is needed. We showed the importance of psychological training program for them to have a daily conversation to build a trusting relationship with parents, to inform parents of their children's developmental issues after understanding what parents think, and to share a common view of necessary support by continuously watching the growth of children with their parents.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：初任保育者 保護者支援 困難感 養成教育

## 1. 研究開始当初の背景

2008年に同時改訂された幼稚園教育要領、及び保育所保育指針では、園と家庭の連携がこれまで以上に重視されており、とくに保育所においては、児童福祉法で規定されている保育士の2つの業務としての「児童の保育」と「保護者に対する支援」とがより一層求められるようになった。

実践現場で求められる保育技術を実践的に学ぶ機会となる実習では、子どもに対する保育が中心であり、家庭との連携や支援に関することはあまり実習内容に含まれていないのが現状である。そのため、養成校を卒業後、間もない初任を含む若手保育者は保育経験の浅さから子どもへの理解やかかわりが十分でない上に、自らが家庭や子どもを持った経験がないことなどから、保護者から保育の専門家として軽視されがちであったり、保護者からの相談や要望に的確に応じられにくかったり等、保護者との良好な関係性の構築は容易でない。しかしながら、子どもに対する保育を行う上でも、保護者と良好な関係を築き、適宜、情報交換しながら、共に子ども理解を深め、適切な発達援助をしていくことは若手保育者といえども担わざるを得ないのが現実である。

一方、このような若手保育者の力量形成をめざして、研修を受けたり、管理職者や経験の多い同僚から適宜、アドバイスを受けたりすることは行われているが、このような形式は、通常、若手保育者は講師やベテランから学ぶ、指導を受けるという受動的な関係になりやすい。そこで、より主体的に保護者との連携や支援の力量を向上させるための若手保育者を対象とした研修プログラムの構築が必要であると考えられた。

## 2. 研究の目的

(1) 初任を含む若手保育者が家庭との連携の

必要性を認識しながらも十分な連携が図れないため、子どもの保育に行き詰まりを感じている事例を収集して、原因分析を行う。

(2) 若手保育者同士が所属園の枠を離れて、事例検討等を行う相互研修会をもってピア・サポート関係をつくり、相互に実現可能な対応の仕方を見いだすプロセス、および参加者個々のポートフォリオの作成を実践に活かす方法について検討する。

(3) 初任保育者のための、“子どもと家族をつなぐ心理学的研修プログラム”を提案する。

## 3. 研究の方法

(1) グループインタビュー法の採用

調査対象者相互に自己紹介や近況を報告しあう等して交流を図った後、昼食をはさんで、90分間のグループインタビュー（安梅，2001）を実施した。

グループインタビューの冒頭に筆者が「みなさんが経験した、あるいは現在経験している、保護者への対応で難しさを感じることを、そしてそのような場合、どのように対処しているかについて自由に発言してください。どなたかの発言を聞いて、似た経験や思いついたことがある場合は、どんどん発言してください。なお、お互いに発言内容を否定すること等がないよう十分気をつけてください」と半構造的なインタビューとなるよう教示し、倫理的配慮は日本保育学会倫理綱領（2007）に準じて行った。筆者は司会者役として、必要に応じて発言内容をまとめたり、「そのような場合はどのように対処するのですか」と研究目的に沿った発言が得られるよう質問を投げかけたりしたが、できるだけ調査対象者間でのディスカッションが展開するよう、消極的なかわりにとどめた。また、保育経験年数の長短が調査対象者の発言し難さにつながらないよう、必要に応じて発言者を指

名するなど、発言しやすい雰囲気を作るよう努めた。インタビューの様子は、調査対象者の同意を得て、ビデオカメラとICレコーダー各1台で録画・録音した(調査1, 調査3)。

## (2) 質問紙調査

### ① 調査方法

4年制〇大学の幼児教育専攻の卒業生で幼稚園または保育所に幼稚園教諭または保育士として勤務し、卒後5年未満の者を対象に、2012年8月に郵送による質問紙調査を行った(郵送数67)。回答は、同封の返信用封筒に入れて返送してもらった。

### ② 調査内容

調査内容としては、保護者支援の目標及び実際に行っている支援内容、保護者支援で重視していることや困難を感じていること及びその際の対処の仕方、保護者との連携の必要性を感じる場面、力量形成のために今後学びたいことに関することであった。ほとんどが自由記述による回答形式であった。

### ③ 分析方法

選択式の回答については量的分析を、自由記述式の回答についてはKJ法(川喜田, 1967)を用いて回答の類型化を試みた。まず、回答内容を1つの意味内容に切片化した。1名分の回答に2つ以上の内容が含まれている場合には回答を分離し、2つ以上の切片として分類し、意味内容の似た切片をまとめて類型化を行った。

### ④ 倫理的配慮

日本保育学会の倫理綱領に準じ、調査対象者には送付した質問紙とは別に依頼文書を添え、調査概要を示した上で、調査結果を公表することを記載した。ただし、対象者の個人情報の保護及び意思を尊重することを記載し、調査用紙の返送をもって研究の趣旨に同意したこともものとして同定した。

## 4. 研究成果

### (1) 調査1

卒業後6年未満の新任を含む若手保育者9名を対象にグループインタビュー調査を行い、保護者との連携や支援の現状、とくに対応の難しい保護者に関することやその改善策について、それぞれの経験を具体的に問うた。その結果を保護者対応において難しさを感じる困難事態として、10個の「重要アイテム」にまとめ、最終的に、5つの「重要カテゴリー」を導出した。まず、保護者から保育者に発せられた場合を「受信型」とし、「保育の問題点を指摘する保護者への対応」「保育への要望を示す保護者への対応」が重要カテゴリーとしてまとめられた。反対に、保育者から保護者にはたらきかけた場合を「発信型」とし、「子どもや保育に無関心な保護者への対応」「子ども理解の不適切な保護者への対応」の2つが重要カテゴリーとしてまとめられた。さらに、保育者と保護者の関係に影響を与える環境的要因として、「保育体制上の課題」という独立したカテゴリーを設定した。

「受信型」の対応では、保護者を起点としているため、保護者が保育者に訴えたい内容が明確であるうえ、保育者としては突然の対応を迫られるため、経験の少ない若手の保育者は動揺しやすいという問題点がある。まずは、保護者の訴えに耳を傾けることに集中し、回答や対応を求められても、一人で曖昧な判断をしてしまわず、自信を持って管理職者や同僚に助言を求める冷静さが必要があることが明らかになった。とくに、新任は日々の業務をこなして無事に過ごすことに精一杯で、何をどうすれば良いか分からない状況にある(谷川, 2013)なかで、保護者から保育上の不備を指摘されると動揺してしまい、対応不能に陥る可能性である。一方、「発信型」の分類からは、子どもに関心の乏しい保護者

に対して積極的に子どもの良いところを伝える実践や、子ども理解の不適切な保護者に対して、新たな子どもの見方を伝えるなど、保育を通して理解した子どもの特性や状況を説明するといった、心理教育的なアプローチを求められることが明らかになった。さらに、保育所の場合、家庭によって送迎時間がバラバラであることが連携の難しさにつながることも示された。眼前の保護者の様子やパーソナリティ、子どもの持っている課題や状況などを総合的に加味して、“今、ここ”でどのような支援や対応が必要か、見通しを持ちながらかかわる総合的な判断力と力量とを求められることが改めて確認された。当然、若手保育者がいきなり身につけられる力量ではない。他の保育者の実践をより多く知識として獲得する努力が欠かせないであろう。また、今回のグループインタビューのインタビュー集団のように、キャリア発達段階が類似した者同士が、相互に困難を出し合い、それぞれが経験した事例をもとに対応のあり方を検討することは、自分に対応する当事者となった場合のイメージワークにもつながる友好的研修になり得る可能性も示唆された。

## (2) 調査 2

保育経験 5 年未満の保育者 37 名を対象に、保護者との連携及び支援の現況について質問紙調査を行った結果を、さらに 2 年未満と 2 年以上 5 年未満の 2 グループに分け、新任としての経験の少ない時期の特徴を捉えるため比較検討を試みた。その結果、以下のような知見が得られた。

保護者支援で重視していることについては、園種や経験年数によらず、送迎時の会話が挙げられた。保護者との信頼関係の構築に向けて、日々、園での様子を丁寧に伝えながら園の活動のねらいや取り組みへの理解を

促したり、家庭での様子を聞いて園と家庭との連続性を大切にしながら発達援助や生活習慣の自律を図ったりしていることが明らかになった。一方、ネガティブな内容を伝えるに際しては、経験年数が 2 年未満の教師と 2 年以上の保育士に困難感が見いだされた。入職後間もない 1 人担任の教師と、複数担任とはいえ、先輩保育士に頼りにくくなった保育士という立場であるためと推察された。子どもの課題に対して共通認識をもち、保護者との関係を構築するためには、保護者との連携が必要であることは多くの保育者が実感していた。しかし、どのように発達相談を進めていくかについては、全ての保育者に困難感が生じていた。とりわけ、どのように集団生活における実態を伝えて保護者の理解を得て連携するか、個々のケースに応じてどのように個別の支援を行うかに関して、有用な言葉の選択、はたらきかけ方に困難感が認められた。保育経験の浅さが力量不足の原因となるのは仕方ないが、保護者よりも若年である自分の言動が保護者に否定的に捉えられることを危惧して支援に消極的になっているものと理解された。これは、経験の浅い保育者が自信を持たず、コミュニケーションに躊躇する姿として出現しやすい特徴であるといえよう。

さらに、本研究で得た結果をもとに養成校での教授内容についての試案を 2 点導出した。1 点目は、子どもの発達やその援助のあり方に関する理論知をしっかりと固め、保育経験は未熟ながらも理論として可能な範囲で保護者の子ども理解を促す力量を形成しておくことである。2 点目は、多様な子どもの課題や保護者に応じた臨機応変な支援力を身につけるために、あらかじめ入職当初に陥りそうな困難場面とその状況を具体的な実践例を通して教授しておくことである。養

成校での保護者との対応場面を同窓の先輩が経験している例を取り上げるなどして現実感を高め、効果的なロールプレイを考案して実践する内容や方法を検討することが課題として挙げられた。

### (3)調査3

初任1年目の保育実践全体における保護者との連携や支援の位置づけと困難について、4人を対象にグループインタビューを行った。

最初の3ヶ月は、日々の保育上の役割をこなしていくことが精一杯で、保護者から担任保育者であるとあまり認知されていなかったという。多様な行事を介して、新任保育者としての自分を認知してもらい、それを端緒に、保護者との直接的なかかわりが持てるようになったことが共有された。

このような保護者との直接的な関係構築には、日々の保育の姿から、一人の保育者として認めてもらえるかがカギとなる。その際、日々の保育の中で、一人一人の子どもの様子をしっかりと捉え、成長や新たな姿、遊びや生活上の何気ないエピソードを見逃さず、保護者に伝えていくことが基盤となることが改めて確認された。1人のインタビューは、園内では困った人物とほとんどの保育者が敬遠する父親に、「おれが教育係になってやる」と言われ、毎日、個人的な問題点を指摘された経験をもっていた。他のインタビューは、自分には耐えられないとの反応であったが、当該のインタビューは、素直に父親の言葉を受け止める姿勢を崩さなかったところ、父親の方が、同僚の保育者に対して、インタビューを守ってやるように言ってくれたという。新任保育者が厄介だと言われる保護者をひたすら受けとめたことによって、相互の信頼関係が築かれた事例である。この事例のように、新任には新任なりの保護者とのかかわり方があるのではないかという示唆である。知識や経験がなくても可能なのは、保育者として成長していこうとする真摯な姿勢なのかもしれない。養成校においては、このような心の教育も含めて、教育することの重要性を確認できた。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①片山美香, 若手保育者が有する保護者支援の特徴に関する探索的研究—保育者養成校における教授内容の検討に生かすために—, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 6巻,

2016、11-20, <http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/54016>

②片山美香, 若手保育者による保護者支援の困難さと対応に関する検討—経験に基づく保育者としての成長過程に着目して—岡山大学大学院教育学研究科研究集録, 159号, 2015、11-20, <http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/metadata/53566>

[学会発表] (計1件)

①片山美香, 初任保育者が行う保護者支援の実態に関する検討, 日本教育心理学会第56回総会, 2014年11月8日, 神戸国際会議場

### 6. 研究組織

#### (1)研究代表者

片山 美香 (Mika, Katayama)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号: 00320052